

協同学習とプロジェクトアドベンチャーの交点を考える

ー協同学習とプロジェクトアドベンチャーの相補的实践を巡る議論ー

企画者・話題提供者：寺中祥吾（プロジェクトアドベンチャージャパン）

企画者・指定討論者：関田一彦（創価大学教育学部）

キーワード：協同学習、プロジェクトアドベンチャー（PA）、身体性を伴う協同、
手法の相補的活用

1. 企画趣旨

多くの協同学習実践家は、学習目標（知識・技能の習得）と態度目標（対人関係力などの向上）の同時学習・同時達成を目指して授業している。むしろ、学びを社会的な営みであると考える以上、このふたつの目標は相互に関連し合っており、切り離すことはできない。ある一定の「対人関係力」を備えているから「学習目標」が達せられるし、一定の知識・理解を前提に学習課題に取り組む中で「態度目標」の達成も可能になる。そして、この同時学習を下支えするのが学習集団の関係性である。

体験学習の一手法であるプロジェクトアドベンチャーは、協同する価値を体感し、協同の土台となる関係性をつくる体験の機会を計画的に提供することができる。さらに、対立や葛藤に向き合う中で、自己を知り他者と関わる力を身につける機会も用意できる。

本企画は、協同学習にプロジェクトアドベンチャーを組み合わせることで、学習目標と態度目標の同時学習を目指す協同学習をより確かなものになる可能性について考えたい。そして参加者とともに、そのための実践上の課題について議論したい。

2. プロジェクトアドベンチャーとは

プロジェクトアドベンチャー（以下PAと略す）は、アドベンチャーアクティビティと呼ばれる、集団の信頼関係を築き協同しながら課題解決を目指す活動と、体験学習の理論や指導法などを組み合わせて構想されてきた。もともとは、ロッククライミングなどを含む長期の山行、徒歩や自転車、ヨットなどでの遠征のようなダイナミックな冒険的活動を使った教育プログラムを行っているアウトワード・バウンド・スクール（OBS）という冒険学校の手法と考え方を学校教育に活かせないかと、1960年代後半、アメリカの高校での実践を中心に始まった。以来、半世紀を経て、体育のみならず、教科教育や生徒指導・カウンセリングまで統合的にカリキュラムがつくられている。

PAでは、素朴な興味や学習上の刺激を出発点にする。アウトドアでの、目の前の断崖を越えてみたいという内側からふつつつと湧くエネルギーを、教室の中においても引き出したいと考えている。そのエネルギーを土台に、知的・社会的なリスクを受け入れ挑戦する

過程で、学習者相互のサポート環境を最大限に活用し、時に個人の能力を超えた挑戦を促す。挑戦を伴う学習体験の中で、乗り越えた経験の達成感や満足感、乗り越えられない経験の悔しさや葛藤は次の学びへの原動力となる。いずれの経験も、その学習体験をふりかえり、学習内容に対する学びを強化し、学習プロセスの解釈と意味づけを行うことで、学びを深める。

このプロセスは、学校の授業で課される課題に取り組む際にも共通していると、PAを実践する教員は考える。特に、「学習者相互のサポート環境を最大限に活用すること」や「達成感や満足感、悔しさや葛藤を次の学びへの原動力とすること」、「ふりかえりによる改善手続があること」などは、協同学習における学習場面とも共通するものといえよう。

3. ラウンドテーブルで目指すこととその進め方

PAによる体験学習にも協同学習にも、「協同で」学び、「協同を」学ぶ体験がある。その考え方と方法論には高い親和性がある。しかし一方で、親和性の高さは感覚的に理解できても、実際の授業場面でのどのように取り組めばいいのか、具体的な実践のイメージが掴めないという話もよく聞く。

協同学習には授業を構造化する理論と具体的な技法がある。初学者から学びを深めていくための道筋を見通すことができ、実践の一步目を踏み出すことができる。PAには、身体性を伴う協同と体験のリアリティがある。学習者は身体性を伴う協同を通して協同する価値を実感し、他者と協同する方法が磨かれる。しかしながら、協同学習での授業場面とPAなど体験学習場面、さらには普段の生活場面とが切り離され、それぞれの強みがうまく組み合わせられない現状がある。

ラウンドテーブルでは、「プロジェクトアドベンチャーとは何か」「協同学習とプロジェクトアドベンチャーの共通点」などについて情報提供をした後、協同学習の実践上の課題や困り感を参加者同士の対話から掘り起す。そこで見えてきた課題や困り感について、「協同学習とプロジェクトアドベンチャーの相補的実践」という切り口から、フロアも交えながら議論を進めたいと考えている。

本企画での議論を通して新たな実践への方向性を見出すことや、「うまくいった、うまくいかない」という個別の課題を越えて検討すべき論点を見出すことを目指したい。